

おはつとつるおのちの町「三の手」をめぐって

防災まちづくりの町版

第九号



発行ノ寺言問を防災のまちにする会

昭和62年1月1日

防災まちづくり計画案が発表!

計画検討組織「一言会」正式発足 四月の区長提案に向けて検討開始

一寺言問地区の防災まちづくり計画の検討が本格的にはじまった。昨年の十二月三日、計画の検討組織「一言会」が、地区内の六町会（東向島一丁目中町会、東向一南町会、東向島宮元町会、堤通一丁目町会、向島五丁目東町会、向島五丁目西町会）と「一寺言問の防災まちづくりを考える」の「わいわい会」により、正式に発足した。一言会では、わいわい会の議論をベースに作成された「一寺言問の防災まちづくり計画案」をたたき台にして、地元の見解を集めながら検討を重ね、今年四月の区長提案を目標に、地区の防災まちづくり計画をまとめていく。

瓦版では、この「防災まちづくり計画案」を全文掲載した。地元の見解としての計画にしていくために、皆さんのご意見を寄せて欲しい。



まず総論をまとめてから、各論にはいりたい

ただ、先ほどして事務局から提出された「一寺言問の防災まちづくり計画案」は、一寺言問地区の将来像と、防災まちづくりの大筋が示されている。行政では、基本構想、基本計画に基づいて実施計画がまとめられ、様々な整備事業がおこなわれていく。この計画案は、その基本構想、基本計画にあたるものを内容にしており、具体的な実施計画については触れていない。「計画に『総論』と『各論』がある」とすれば、「これは『総論』にあたるものだ」と説明しており、『総論』をまとめた後に『各論』にはいるという、段階を踏んだ計画づくりの意向を示している。

一言会では、今後この計画案をたたき台に、各団体が地元の見解を集めながら検討を重ね、そこで

合意に達した事項を正式に「一言問の防災まちづくり計画」として、区長に提案していく。その内容を『総論』とした点については、①この防災まちづくりができること、②この計画の進め方の修復型まちづくりであるため、目標となる将来像とそれに至る道すじを決めることが先決、③地区面積が約70haと広いので、具体的な場所について、また細かな点について協議するのが困難、④具体的に実施していくには、関係住民と十分に協議することが必要、だからだ。

また、区長提案後の展開については、①区にこの計画を尊重して、施策化・事業化してもらい、「実施計画」を地元で再提案してもらい、②地元では、その「実施計画」について協議し、合意したものにのって実施していく、③地元から要求の明らかなものや、地元住民自身で（行政の手を借りず）にできるもの（ルールづくり）

については、行政に再提案していく、と考えているため、まず『総論』をまとめていくことについて議論が集中した。

我々がたてる計画だから、「夢」を語りたい

一言会結成式の後に開かれた第一回理事会では、まずこの「防災まちづくり計画案」を『総論』としてまとめていくことについて議論が集中した。

事務局から提出された計画案は、「総論」で、理想的すぎる。「こういうことが果たしてできるのだろうか」という疑問が地元から出るはずだ」といった教員の理事からの質問から議論は始まった。

この中で、須賀健事務局長は、「逆にいえば、いいことづくめでなければならぬ。こういうまちになってほしいという『夢』と、それに向けてこういうふうな努力しようという方向をまとめるのが、

我々住民のたてる計画だから」と答えた。

各理事からも、まず大筋をまとめていくという方向性について、支持の発言が続いた。

理事ではないが、事務局員として参加したTさんは、母親の立場から「主人はこのまちから離れたというけれど、子供たちはここに、と住んでいたい」、「このまち、いいまちだよね、お母さん」という。そんな子供たちに羨ましいまちをつくってあげたい。私達主婦、母親、そして町会などが努力して、二十年后に「ああ、やってよかったなあ」といいたい。そして私たちの夢を次の世代がつなげていけば、すばらしいことだと思おう」と、長期的な視野にたった計画づくりの必要性に関する意見を述べた。

わいわい会の理事は、「区がこの一寺言問地区で何か整備事業をするにしても、基本的な線は地元

□□□□-□□

本郷局承認

2144

差出有効期間
昭和62年1月
31日まで

文京区本郷三丁目三八番一三三
マヌ都市建築研究所内

一寺言問・わいわい会事務局

防災まちづくり計画(案)アンケート係

(受取人)

本郷スカイビル四階

(差出人)

住所	墨田区				
氏名	電話				
職業	年齢	性別	男・女		

アンケートにご協力下さい

裏面のアンケートにお答え下さい。寄せられたご意見を計画立案の参考にさせていただきます。1月31日までにお送り下さい。

(きりとり線)

※きりとり線で切って、切手をはらずにポストへ

なまず君の要石探し



第五話「住宅まわりのみどり」

まちの人にも楽しんでもらえる緑化事例がこんなにあった。



住宅まわりに緑を飾ると、通りすがりの人も緑を楽しめる



街角に緑を飾ると、街を訪れる人の目印になる。(向島五)

「一寺言問の防災まちづくり計画(案)」

安心とつるおいのまちをめざして

私たちのまち、一寺言問地区(墨田区東向島一・三丁目、堤通一丁目、向島五丁目)は、下町の風情を残すまち、歴史を感じさせるまちです。一方で、地震や火災など災害の危険を抱えるまちでもあります。私たちは、この愛するまちを、より安心して暮らせるまちに、つるおいのあるまちにしていきたいと、地元の創意と熱意を結集して、「ここに「一寺言問の防災まちづくり計画」安心とつるおいのまちをめざして」をまとめた行政の援助を仰ぎながら、防災まちづくりをすすめていきたいと思えます。

防災まちづくりの目標

私たちは、「安心とつるおいのまち」をつくりたい。それは、

- ① 高齢者が住みやすく、若者も住みたくなり、子供たちに誇れるまち
- ② 近所づきあいの良さを受けついで、まとまりのあるまち
- ③ 地元の産業が活発な、賑わいのあるまち
- ④ 人が訪れてきたくなるような、まちそのものが魅力的なまち
- ⑤ そして、地震がいつ来ても安心して住める災害に強いまち

隅田川沿い(堤通一丁目)向島五丁目は、明るくて現代的なイメージの、川と一体になったまちにしていきたい。

東向島三丁目あたりは、閑静で、緑が豊かな、寺町情緒を感じさせるまちにしていきたい。

東向島一丁目あたりは、いわゆる下町の生活が活きづく、活気のあるまちにしていきたい。

向島五丁目あたりは、料亭街がもっていた、しっとりとした雰囲気を与えるまちにしていきたい。

まちの将来像

- (1) 火を出さない、もらわないまち
私たちは、自分の家や近所から火を出さないまちにしたい。そして隣のまちから火をもらわないまちにしたい。
- (2) 災害に対応できるまち
私たちは、力をあわせて防災活動をおこなえば、火の消せるまちにしたい。防災活動の拠点になる広場があり、防災活動に支障のないみちがあり、防災のための水が豊富にありたい。
- (3) ゆくもりの感じられるまち
私たちは、災害から生命と生活を守るために、助けあうこのことができるまちにしたい。まちに暮らす人たちの暖かさを感じられるようなつるおいのあるまちにしたい。

ゆるタテ割り行政のへい害は取り除けるはずだ。」「先頃、日本電気精密の工場が大手建設会社に売却されたが、この跡地利用についても地元の見解がまとまっていない。行政はそれに沿った開発指導がおこなえる。例えば、「墨堤の桜再生」がまとまれば、区は、「敷地から少し後退して建物を建てて、桜を植えてもゆっくりと歩ける歩行空間を確保してくれ」といった行政指導をしていくのではないだろうか。このところまちの変わり方も激しいから、大筋は早めに合意しておく必要がある」と、行政施策に対する有効性を指摘した。

現実的な諸問題も、加味していくべきだろう

二つした中で、地元が現在深刻な問題として受けとめている、交通渋滞の問題やいわゆる「浮浪者問題」については、「21世紀だんだんといつても、現実問題を抜きには語れない。対策の良し悪しは別にして、そういう現実的な問題も加味していく必要がある」「防災まちづくり計画と、まちづくりの前に「防災」がついているのは、このまちづくりに対して東京都が防災生活圏モデル事業として支援しているからで、我々地元にとっては、例えば「安心とつるおいのまち計画」という名前でも良い。だからそういって問題についての対応策も、何らかの形ではない、てきてもかまわないのではないか」「主となるのは、「防災」であるが、そういった防災に直接関連のないと思われるものは、別冊にして区長に提案してもいいのではないかと。(裏面に続く)

